

1A0456532 奈良絵本竹取物語 下巻



右内侍

け内侍久わあわてけうをさうけ  
ひもこうりてあかしく人ころし  
るああうしとくまふんやん  
けとにれあかりおひさうしてこ  
めあふくもやまけんとおぼして  
作のまふもなんちもちて侍るかぐや  
ひめたてまつれ。かほかたちよしと  
きこしめして、御つかひたびしかど、かひ  
なく、見えずなりにけり。かくたひぐ  
しくやはならはすべきと仰らるゝ。



此内侍かへり参りて、此よしをそうす。  
御門きこしめして、おほくの人ころしてけ  
るころぞかしのたまひて、やみに  
けれど、猶、おぼしおはしまして、この  
女のたばかりにやまけん、とおぼして、  
仰たまふ、なんちがもちて侍るかぐや  
ひめたてまつれ。かほかたちよしと  
きこしめして、御つかひたびしかど、かひ  
なく、見えずなりにけり。かくたひぐ  
しくやはならはすべきと仰らるゝ。

おきな、かしこまりて、御返事申やう、この  
めのわらははたへて宮仕つかうまつる  
へぐもあらず侍を、もてわづらひ侍。さ  
りとも、まかりておほせたまはんと  
そうす。これをきこしめして、仰たまふ、  
などか、おきなのおほしたてまらん  
物を、こゝろにまかせざらむ。此女、もし、  
たてまつりたるものならば、おきな  
にかうぶりを、などかたばせざらん。お  
きな、よろこびて、家に帰りて、かぐや姫

おきな、かしこまりて、御返事申やう、この  
めのわらははたへて宮仕つかうまつる  
へぐもあらず侍を、もてわづらひ侍。さ  
りとも、まかりておほせたまはんと  
そうす。これをきこしめして、仰たまふ、  
などか、おきなのおほしたてまらん  
物を、こゝろにまかせざらむ。此女、もし、  
たてまつりたるものならば、おきな  
にかうぶりを、などかたばせざらん。お  
きな、よろこびて、家に帰りて、かぐや姫

おきな、かしこまりて、御返事申やう、この  
めのわらははたへて宮仕つかうまつる  
へぐもあらず侍を、もてわづらひ侍。さ  
りとも、まかりておほせたまはんと  
そうす。これをきこしめして、仰たまふ、  
などか、おきなのおほしたてまらん  
物を、こゝろにまかせざらむ。此女、もし、  
たてまつりたるものならば、おきな  
にかうぶりを、などかたばせざらん。お  
きな、よろこびて、家に帰りて、かぐや姫

なを、つかうまつる  
ましき事を、ま  
いりて申さんとて  
やう、

給ふべきやうや有べきといふ。なを、そ  
らごとにかと、つかまつらせて、しな  
ずやあると見たまへ。あまたのひとの  
こゝろざしをろかならざりしを、むなく  
なしてしこそあれ。きのふけふ、みかどの  
のたまはん事につかん、人ぎゝやさしから  
じといへば、おきなこたへていはく、天下  
の事は、と有ともかくりとも、御いのちの  
あやうきこそ、おほき

なるさはりなれば、

なを、つかうまつる  
ましき事を、ま  
いりて申さんとて  
やう、



仰の事のかしこさに、は彼わらはをまい  
 らせんとて、つかうまつれば宮つかへに  
 出したておば、しぬべしと申。みやつこ  
 丸が手にうませたる子にてもあらず。  
 むかし、山にて見つけたる。かゝればころ  
 ばせも、世の人に、ずはべるとそうせ  
 させ給。御かど、おほせのたまはく、み  
 やつこまろが家は、山もとちかくなり候  
 御かりみゆきしたまはんやうにて  
 見てんやとのたまはず。みやつこまろ

仰の事のかしこさに、は彼わらはをまい  
 らせんとて、つかうまつれば宮つかへに  
 出したておば、しぬべしと申。みやつこ  
 丸が手にうませたる子にてもあらず。  
 むかし、山にて見つけたる。かゝればころ  
 ばせも、世の人に、ずはべるとそうせ  
 させ給。御かど、おほせのたまはく、み  
 やつこまろが家は、山もとちかくなり候  
 御かりみゆきしたまはんやうにて  
 見てんやとのたまはず。みやつこまろ

うし狐いと後す史なり、うんしをりて  
ゆるんよやく、のゆらうての境を、れん  
とまよとて、の門、俄も目を定て、のわ  
りか、けいへく、や、姫、家、入、あ、ふ  
て、る、ま、ふ、ふ、の、み、り、て、ま、う、ら、い、て  
お、ろ、ろ、ん、ま、も、う、ん、と、お、ぼ、し、て、ま、を  
て、入、り、て、ま、う、ら、い、て、お、ぼ、し、て、ま、を  
ま、う、ら、い、て、お、ぼ、し、て、ま、を、  
ま、う、ら、い、て、お、ぼ、し、て、ま、を、  
ま、う、ら、い、て、お、ぼ、し、て、ま、を、

ま、う、ら、い、て、お、ぼ、し、て、ま、を、  
ま、う、ら、い、て、お、ぼ、し、て、ま、を、  
ま、う、ら、い、て、お、ぼ、し、て、ま、を、  
ま、う、ら、い、て、お、ぼ、し、て、ま、を、  
ま、う、ら、い、て、お、ぼ、し、て、ま、を、  
ま、う、ら、い、て、お、ぼ、し、て、ま、を、  
ま、う、ら、い、て、お、ぼ、し、て、ま、を、  
ま、う、ら、い、て、お、ぼ、し、て、ま、を、  
ま、う、ら、い、て、お、ぼ、し、て、ま、を、  
ま、う、ら、い、て、お、ぼ、し、て、ま、を、

が申様、いとの事也。何か、こゝろもなく  
侍らんに、ふとみゆきして御覽せられなん  
とそうすれば、御門、俄に目を定て、御かり  
に出給ふて、かぐや姫の家に入たまふ  
て、みたまふに、ひかりみちて、けうらにて  
ゐたる人有。是ならん、とおぼして、にげ  
て入そでをとらへたまへばおもてをふ  
たぎて候へど、はじめよく御覧じつれば、  
たぐひなくめでたくおほえさせ給ひて、  
ゆるさじとすとて、ゐておはしきさんと

するにかぐやひめ、こたへてそうす、をのが  
身は、此国に生て侍らばこそ、つかひ給はめ。  
いとゐておはしまし難くや侍らんとそう  
す。御門、などかさあらむ。なを、ゐておはし  
まさんとて、御こしをよせ給ふに、此かぐ  
やひめ、きとかげに成ぬ。はかなくくちお  
し、とおぼして、げにたゞ人にはあらざり  
けり、とおぼして、さらば、御ともには、ゐ  
ていかじ。もとの御かたちとなりたまひね。  
それを見てだにかへりなんとおほせらる

とくくやむかしとてわづらひのちもぬ  
四つもとせしむれりしうらなませ  
まゝらるるくわくえあつたまつ、もを  
よらこむれはえはまらつ百らんん  
あるしうらうほつうあつたみ  
わやひめをとどめてかへり給はん事  
を、あかずくちおしくおぼしけれど、  
玉しゐをとどめたるこちしてなん、  
かへらせたまひける。御こしにたて  
まつりて後に、かぐやひめに、

かへるさのみゆきものうくおもほえて  
そむきてとまるかぐやひめゆへ

御返事

むぐらはふ下にも

としはへぬる身の

なにかはたまの

うてなをも見む

れば、かぐやひめ、もとのかたちになりぬ。

御門、なをめでたくおぼしめさるゝ事、せ

きとめがたし。かくみせつる宮つこ丸を

よろこび給ふ。さて、仕まつる百くはん人々

あるじいかめしうつかうまつる。みかど、

かぐやひめをとどめてかへり給はん事

を、あかずくちおしくおぼしけれど、

玉しゐをとどめたるこちしてなん、

かへらせたまひける。御こしにたて

まつりて後に、かぐやひめに、

かへるさのみゆきものうくおもほえて

そむきてとまるかぐやひめゆへ

御返事

むぐらはふ下にも

としはへぬる身の

なにかはたまの

うてなをも見む





ちとせの御らんじて、いかゞかへり給はん  
 そらもなくおぼさる。御心はさらにたち  
 帰るべくもおぼされざりけれど、さり  
 とて、夜をあかし給ふべきにあらねば、  
 かへらせ給ひぬ。つねにつかうまつる人  
 を見たまふに、かぐやひめのかたはらに  
 よるべくだにあらざりけり。こと人よりは、  
 けうらなりとおぼしける人の、かれにお  
 ぼし合すれば、人にもあらず、かぐや姫のみ  
 御こゝろにかゝりて、たゞひとり過し給ふ。

これを、御かど、御らんじて、いかゞかへり給はん  
 そらもなくおぼさる。御心はさらにたち  
 帰るべくもおぼされざりけれど、さり  
 とて、夜をあかし給ふべきにあらねば、  
 かへらせ給ひぬ。つねにつかうまつる人  
 を見たまふに、かぐやひめのかたはらに  
 よるべくだにあらざりけり。こと人よりは、  
 けうらなりとおぼしける人の、かれにお  
 ぼし合すれば、人にもあらず、かぐや姫のみ  
 御こゝろにかゝりて、たゞひとり過し給ふ。

よしなく、御かたぐにもわたりたまはず、  
かぐやひめの御もとにぞ、御ふみをかき  
てかよはさせ給ふ。御かへり、さすがにくか  
らずきこえかはし給ひて、おもしろく、  
木草につけても御哥をよみてつかはず。  
かやうにて、御こころをたがひになぐさめ  
給ふほどに、三年ばかりありて、春のはじ  
めより、かぐや姫、月のおもしろふ出たるを  
見て、つねよりも物おもひたるさま也。ある  
人の、月かほ見るは、いむ事と、せいしけれ

ども、ともすれば、人まにも月を見ては、  
いみじくなき給ふ。七月十五日の月  
に出あて、せちに物おもへるけしき也。  
ちかくつかはるゝ人々、竹取のおきな  
につげて云、かぐやひめ、れいも月をあはれ  
がりたまへども、此ころとなりては、たゞこ  
とにも侍らざめり。いみじくおぼしなげく  
事あるべし。よし〜見奉らせたまへと  
いふをきよて、かぐやひめにいはく様、なん  
どうこゝちすれば、かく物を思ひたるさま

よしなく、御かたぐにもわたりたまはず、  
かぐやひめの御もとにぞ、御ふみをかき  
てかよはさせ給ふ。御かへり、さすがにくか  
らずきこえかはし給ひて、おもしろく、  
木草につけても御哥をよみてつかはず。  
かやうにて、御こころをたがひになぐさめ  
給ふほどに、三年ばかりありて、春のはじ  
めより、かぐや姫、月のおもしろふ出たるを  
見て、つねよりも物おもひたるさま也。ある  
人の、月かほ見るは、いむ事と、せいしけれ  
ども、ともすれば、人まにも月を見ては、  
いみじくなき給ふ。七月十五日の月  
に出あて、せちに物おもへるけしき也。  
ちかくつかはるゝ人々、竹取のおきな  
につげて云、かぐやひめ、れいも月をあはれ  
がりたまへども、此ころとなりては、たゞこ  
とにも侍らざめり。いみじくおぼしなげく  
事あるべし。よし〜見奉らせたまへと  
いふをきよて、かぐやひめにいはく様、なん  
どうこゝちすれば、かく物を思ひたるさま

かて月をみてもあらんそとて、猶、月出れ  
し出居つゝなげき思へり。夕やみには、物  
思はぬけしき也。月の程になりぬれば、  
なを、時ぐは、うちなげき、なきなどす。  
これを、つかふものども、なを物おぼす  
事あるべしときゝやけど、おやははじ  
めて、何事ともしらず八月十五日ばかりの月  
にいで居て、かぐやひめ、いといたくなき給ふ。  
人めも、今はつゝみたまはずなきたまふ。  
これを見て、おやども何事ぞととひさ

かて月をみてもあらんそとて、猶、月出れ  
し出居つゝなげき思へり。夕やみには、物  
思はぬけしき也。月の程になりぬれば、  
なを、時ぐは、うちなげき、なきなどす。  
これを、つかふものども、なを物おぼす  
事あるべしときゝやけど、おやははじ  
めて、何事ともしらず八月十五日ばかりの月  
にいで居て、かぐやひめ、いといたくなき給ふ。  
人めも、今はつゝみたまはずなきたまふ。  
これを見て、おやども何事ぞととひさ

にて月を見たまふぞ。うましき世に  
と云。かぐやひめ、見れば、せけんこゝろほ  
そく、あはれに侍る。なでう物をかなげき  
侍るべきと云。かぐやひめの有所にいたり  
てみれば、猶物おもへるけしき也。これを  
見て、有仏、何事思ひ給ふぞ。おぼす  
らん事、何ごとぞといへば、思ふ事もな  
し。物なん心ぼそくおぼゆるといへば、  
おきな、月なみたまふぞ。これをみた  
まへば、物おぼすけしきは有ぞといへば、

いかで月をみではあらんとて、猶、月出れ  
ば、出居つゝなげき思へり。夕やみには、物  
思はぬけしき也。月の程になりぬれば、  
なを、時ぐは、うちなげき、なきなどす。  
これを、つかふものども、なを物おぼす  
事あるべしときゝやけど、おやははじ  
めて、何事ともしらず八月十五日ばかりの月  
にいで居て、かぐやひめ、いといたくなき給ふ。  
人めも、今はつゝみたまはずなきたまふ。  
これを見て、おやども何事ぞととひさ

くぐや姫ありては、先々も申さんと  
おもひしども、かならず、心まどはし給はん  
ものぞ、と思ひて、今まで過し侍りつるなり。  
さのみやはとて、うち出侍りぬるぞ。をのが  
身は、此国の人にもあらず。つきのみやこの  
人也。それをなん、むかしのちぎりありけ  
るによりなん、此世界にはまうできたり  
ける。今はかへるべきに成にければ、此月の十  
五日に、彼もとの国よりむかへに人くまうで  
こんず。さらずまかりぬへければ、おぼしなげ

わんがかなしき事を、此はるより思ひなげ  
き侍るなりといひて、いみじくなくを、おき  
なこは、なでうことをたまふぞ、竹の中よ  
り見つけきこえたりしかど、なたねの大  
きさおはせしを、わがたけたちならぶま  
でやしなひたてまつりたるわが子を、何人  
かむかへ聞えん。まさにはゆるさんやといひ  
て、我こそしなめとなきのゝしる事、  
いとたへがたげなり。かぐやひめ云、月の  
都の人にて父母あり。かた時の間とて、

はぐ。かぐや姫、なくく云、先々も申さんと  
おもひしども、かならず、心まどはし給はん  
ものぞ、と思ひて、今まで過し侍りつるなり。  
さのみやはとて、うち出侍りぬるぞ。をのが  
身は、此国の人にもあらず。つきのみやこの  
人也。それをなん、むかしのちぎりありけ  
るによりなん、此世界にはまうできたり  
ける。今はかへるべきに成にければ、此月の十  
五日に、彼もとの国よりむかへに人くまうで  
こんず。さらずまかりぬへければ、おぼしなげ

かんがかなしき事を、此はるより思ひなげ  
き侍るなりといひて、いみじくなくを、おき  
なこは、なでうことをたまふぞ、竹の中よ  
り見つけきこえたりしかど、なたねの大  
きさおはせしを、わがたけたちならぶま  
でやしなひたてまつりたるわが子を、何人  
かむかへ聞えん。まさにはゆるさんやといひ  
て、我こそしなめとなきのゝしる事、  
いとたへがたげなり。かぐやひめ云、月の  
都の人にて父母あり。かた時の間とて、

かみよまもつてしうしうわくしん  
よはあまの年をつめよらんり  
まはゆれ父母さまもわかしん  
まはくえんよらんりしん  
えまつりしんしんしん  
しんしんしんしんしん  
ゆらんしんしんしんしん  
しんしんしんしんしん  
しんしんしんしんしん  
しんしんしんしんしん  
しんしんしんしんしん

らひて、こひしからん事のたへがたく、湯  
水のまれず、おなじこゝろになげかし  
がりけり。此事を、御門、きこしめして、  
竹とりが家に御つかひつかはさせ給ふ。  
御使に、たけとり出あひて、なく事限り  
なし。此事をなげくに、ひげもしろく、こ  
しもかゞまり、目もたゞれにけり。おきな、  
今年は五十八ばかりなりけれども、物思ひに  
は、かた時になん、老になりにけりと見ゆ。  
御つかひ、おほせごととて、おきなに云、いと

かの国よりまうでこしかども、かくこの国  
にはあまたの年をへぬるになんあり  
ける。彼国の父母の事もおぼえず、こゝ  
には、かく久しくあそびきこえて、ならひ  
たてまつり、いみじからんこちもせず。かな  
しくのみある。されど、をのがこゝろならず  
まかりなるとするといひて、もろともに  
いみじうなく。つかはるゝ人も、年ごろなら  
ひて、たちわかれなん事を、心ばへなど  
あてやかに、うつくしかりつることをみな

らひて、こひしからん事のたへがたく、湯  
水のまれず、おなじこゝろになげかし  
がりけり。此事を、御門、きこしめして、  
竹とりが家に御つかひつかはさせ給ふ。  
御使に、たけとり出あひて、なく事限り  
なし。此事をなげくに、ひげもしろく、こ  
しもかゞまり、目もたゞれにけり。おきな、  
今年は五十八ばかりなりけれども、物思ひに  
は、かた時になん、老になりにけりと見ゆ。  
御つかひ、おほせごととて、おきなに云、いと

あはれなるしるしをみれば、ま  
ことにかとおほせ給ふ。竹とり、なくく  
申、此十五日になん、月のみやこより、かぐ  
やひめのむかへにまうでくなる。たうと  
くとはせ給ふ。此十五日には、人く給はりて、  
月のみやこの人まうでこば、とらへ  
させんと申。御つかひ、かへりまいりて、おき  
なの有さま申て、そうしつる事ども  
申を、きこしめして、のたまふ一目見た  
まひし御心にだにわすれたまはぬに、

明くれみなれたるかぐやひめをやりて、  
いかゞおもふべき。かの十五日、つかさぐに  
おほせて、ちよくし、少将高野のおほ  
くにといふ人をさして、六あのかさ

合て式千人の  
人を竹とりが

家につかは  
さる。

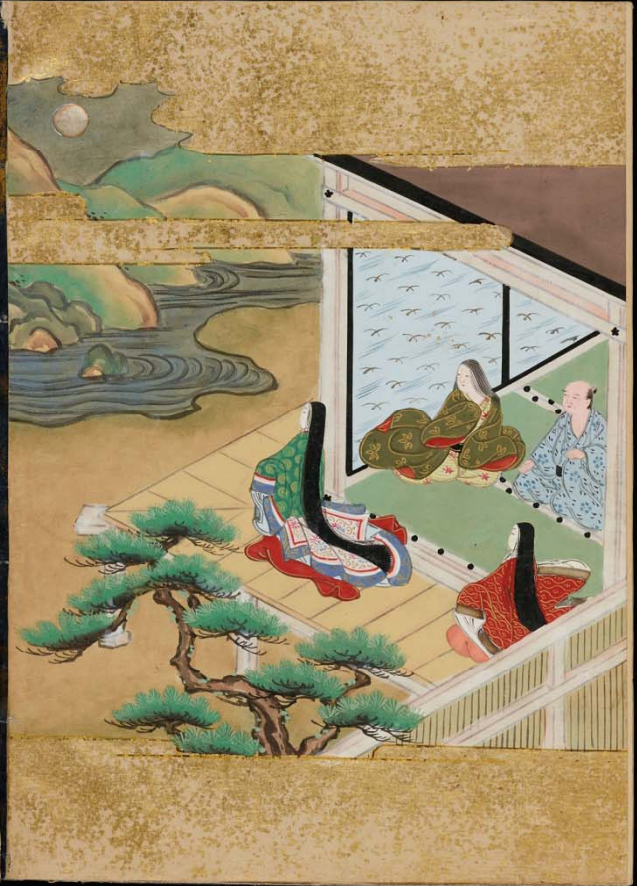
ころぐるしくものおもふなるは、ま  
ことにかとおほせ給ふ。竹とり、なくく  
申、此十五日になん、月のみやこより、かぐ  
やひめのむかへにまうでくなる。たうと  
くとはせ給ふ。此十五日には、人く給はりて、  
月のみやこの人まうでこば、とらへ  
させんと申。御つかひ、かへりまいりて、おき  
なの有さま申て、そうしつる事ども  
申を、きこしめして、のたまふ一目見た  
まひし御心にだにわすれたまはぬに、

明くれみなれたるかぐやひめをやりて、  
いかゞおもふべき。かの十五日、つかさぐに  
おほせて、ちよくし、少将高野のおほ  
くにといふ人をさして、六あのかさ

合て式千人の  
人を竹とりが

家につかは  
さる。

家よのわかれとよりよ人の屋のうへよよ  
 人家れくく木かゆけつりよ合てあを  
 るぬのしきくゆり吹けまじりくくも  
 りあをゆけつて木を屋れくくゆめ  
 ともく人よわりてよももゆめぬよこめ  
 共内よおや姫をとりこく人てわくあ  
 かしぬよこめれすこく人すくくよ木を  
 おくくまけまらうくまきりりあよえれ人  
 よしよまけんやといひて屋のうへよあ人  
 ひとにいはいく露も物そらにかければ、ふ



家に、つるぢの上に千人、屋のうへに千  
 人、家の人々おほかりけるに合て、あけ  
 るひまなくまもらす。此まもる人くも  
 弓矢をたひして、おもやのうちには、女  
 どもばんにおりてまもらす。女、ぬりごめ  
 の内に、かぐや姫をいだかへており。おき  
 なも、ぬりごめの戸さして、戸ぐちにおり。  
 おきなの云、かばかりまもる所に、天の人  
 にもまけんやといひて、屋のうへにおる人  
 ひとにいはいく、露も物そらにかければ、ふ





まればらね、ゆりまじも、いふや  
れまじらわげとく、程なくまかりぬべき  
ちりしとあひるまじく、ゆりまじ親達の  
ふらんをいさゝかかだにつかうまつらで、  
まじらん道もやすくも有まじきに、日頃  
しむおておし、つられい、いさゝかかだ  
と、いさゝかかだに、いさゝかかだに、  
あひるまじゆりぬ、いさゝかかだに、  
いさゝかかだに、いさゝかかだに、  
ゆりまじ、いさゝかかだに、いさゝかかだに、

せとらんあつま、いさゝかかだに、  
いさゝかかだに、いさゝかかだに、  
ゆりまじ、いさゝかかだに、いさゝかかだに、  
いさゝかかだに、いさゝかかだに、  
いさゝかかだに、いさゝかかだに、  
いさゝかかだに、いさゝかかだに、  
いさゝかかだに、いさゝかかだに、  
いさゝかかだに、いさゝかかだに、  
いさゝかかだに、いさゝかかだに、  
いさゝかかだに、いさゝかかだに、

事のくちおしう侍りけり。ながきちぎりのなかりければ、程なくまかりぬべきなめりと思ひ、かなしく侍るなり。親達のかへり見を、いさゝかかだにつかうまつらで、まからん道もやすくも有まじきに、日頃も出ゐて、ことしばかりのいとまを申つれど、さらにゆるされぬによりてなん、かく思ひなげき侍る。御ころをのみまどはしてさりなんことの、かなしく、たえがたく侍るなり。かのみやこの人は、けうちにおひを

せずなん、思ふ事もなく侍るなり。さるところへまからんずるも、いみじく侍らず。老おとろへたまへるさまを、見たてまつらざらん事、こひしからめといひて、おきな、むねいたき事なしたまふぞ。うるはしきすがたしたるつかひにもさはらじとねたみおり。かゝるほどに、よひうちすぎて、ねのこくばかりに、家のあたり、ひるのあかさにもすぎてひかりたり。もち月のあかさを

すめくあふらちのわしと人れものあ  
かへんしの御ちと見えも人、雲にの  
りておりきて、土より五尺ばかりあがりた  
るほどにたちつらねたり。内外なる人  
の心ども、物におそはるゝやうにて、相たゝ  
かはん心もなかりけり。からうじておもひを  
こして、弓矢をとりたてんとすれども、手  
に力もなくなりて、なへかゝりたる中に、  
心さかしきもの、ねんじて、いんとすれ共、  
ほかざまへいきければ、あれもたたかはず、

ふれうちとてまもりあへり  
たてる人どもは、さうぞくのきよなる  
事、物にもにずとぶ車一ぐしたり。  
らがいさしたり。其中に王とおぼし  
き人、宮つこまろ、家にまうでこといふ  
に、たけくおもひつるみやつこまろも、物  
に急ひたることちして、うつぶしにふせり。  
いはく、汝、おさなき人、いさゝかなるくど  
くをおきなつくりけるによりて、汝がた  
すけにとて、かた時のほどとてくだし

十あはせたるばかりにて、有人の毛のあ  
なさへ見ゆる程なり。大空より、人、雲にの  
りておりきて、土より五尺ばかりあがりた  
るほどにたちつらねたり。内外なる人  
の心ども、物におそはるゝやうにて、相たゝ  
かはん心もなかりけり。からうじておもひを  
こして、弓矢をとりたてんとすれども、手  
に力もなくなりて、なへかゝりたる中に、  
心さかしきもの、ねんじて、いんとすれ共、  
ほかざまへいきければ、あれもたたかはず、

心地、たゞしれにされて、まもりあへり。  
たてる人どもは、さうぞくのきよなる  
事、物にもにずとぶ車一ぐしたり。  
らがいさしたり。其中に王とおぼし  
き人、宮つこまろ、家にまうでこといふ  
に、たけくおもひつるみやつこまろも、物  
に急ひたることちして、うつぶしにふせり。  
いはく、汝、おさなき人、いさゝかなるくど  
くをおきなつくりけるによりて、汝がた  
すけにとて、かた時のほどとてくだし

あはれとて此年よりさうしては、こゝね  
給ひて身をかへたるがごとくなりけり。  
かぐやひめはつみをつくり給へり  
ければ、かくいやしきをのれがもとに、  
しばしおはしつるなり。つみのかぎり  
はてぬれば、かくむかふる。おきな  
はなきなげく、あたはぬ事也。はや返  
したてまつれといふ。おきなこたへて  
申。かぐやひめをやしなひたてまつる  
事、廿余年になりぬ。かた時との給ふ

よのち、くちやゆいぬ。又、ことところに、  
かぐや姫と申人ぞ、おはしますらんと  
云。こゝにおはするかぐやひめは、おもきや  
まひをしたまへば、え出おはすまじと申  
せば、其返事はなくて、やの上に、とぶ車  
をよせて、いざ、かぐやひめ、きたなき所に、  
いかでか久しくおはせんといひ、たてこめ  
たるところの戸、則たゞあきにあきぬ。  
かうしども、人はなくしてあきぬ。女いだ  
きてゐたるかぐやひめ、ともに出ぬ。えと

しを、そこらの年ごろ、そこらのこがね  
給ひて、身をかへたるがごとくなりけり。  
かぐやひめはつみをつくり給へり  
ければ、かくいやしきをのれがもとに、  
しばしおはしつるなり。つみのかぎり  
はてぬれば、かくむかふる。おきな  
はなきなげく、あたはぬ事也。はや返  
したてまつれといふ。おきなこたへて  
申。かぐやひめをやしなひたてまつる  
事、廿余年になりぬ。かた時との給ふ

に、あやしくなり侍りぬ。又、ことところに、  
かぐや姫と申人ぞ、おはしますらんと  
云。こゝにおはするかぐやひめは、おもきや  
まひをしたまへば、え出おはすまじと申  
せば、其返事はなくて、やの上に、とぶ車  
をよせて、いざ、かぐやひめ、きたなき所に、  
いかでか久しくおはせんといひ、たてこめ  
たるところの戸、則たゞあきにあきぬ。  
かうしども、人はなくしてあきぬ。女いだ  
きてゐたるかぐやひめ、ともに出ぬ。えと

どむまじければ、たゞさしあふぎて、  
なきおり。竹とり、心まどひてなきふせ  
るところに、よりに、かぐや姫云、こゝにも、  
心にもあらで、かくまかるに、のぼらんを  
だに、みをくり給へといへども、なにしに、  
かなしきに、みをくりたてまつらん。我を  
いかにせよとて、すてゝはのぼり給ふぞ。ぐし  
て、ゐておはせねと、なきてふせれば、御心  
まどひぬ。文を書置てまからん。こひしから  
ん折々、取出てみたまへとて、うちなき

てかくこと葉は、此国に生れぬるとならば、  
なげかせたてまつらぬほどまで侍らで、  
過わかれぬる事、返すくほゐなくこ  
そおぼえ侍れ。ぬぎをく衣を、かたみとみ  
たまへ。月の出たらん夜は、見をこせ給へ。  
見すてたてまつりてまかるそらよりも  
落ぬべき心ちすると、書をく。天人の  
中に、もたせたるはこあり。あまの羽  
ごろもいれり。又、あるは、不死のくすり  
入り。ひとりの天人云、つぼなる御くす

どむまじければ、たゞさしあふぎて、  
なきおり。竹とり、心まどひてなきふせ  
るところに、よりに、かぐや姫云、こゝにも、  
心にもあらで、かくまかるに、のぼらんを  
だに、みをくり給へといへども、なにしに、  
かなしきに、みをくりたてまつらん。我を  
いかにせよとて、すてゝはのぼり給ふぞ。ぐし  
て、ゐておはせねと、なきてふせれば、御心  
まどひぬ。文を書置てまからん。こひしから  
ん折々、取出てみたまへとて、うちなき

てかくこと葉は、此国に生れぬるとならば、  
なげかせたてまつらぬほどまで侍らで、  
過わかれぬる事、返すくほゐなくこ  
そおぼえ侍れ。ぬぎをく衣を、かたみとみ  
たまへ。月の出たらん夜は、見をこせ給へ。  
見すてたてまつりてまかるそらよりも  
落ぬべき心ちすると、書をく。天人の  
中に、もたせたるはこあり。あまの羽  
ごろもいれり。又、あるは、不死のくすり  
入り。ひとりの天人云、つぼなる御くす

とておぼしめし給へりしは  
まことなりしやうらんものぞとて、もてよ  
うとていさゝかなめたまひて、すこし、か  
たみとてぬぎ置ころもにつゝまんとす  
れば、ある天人つゝませず。御ぞをとり  
出して、きせんす。その時に、かぐやひめ、  
しばしまてといひ、きぬきせつる人は、  
心ことに成なりといふ。もの一こと、いひ置  
べき事ありけりと云て、文かく。天人、  
をそしと心もとながりたまひ、かぐや

姫やれぬ事よのたまひそとて、い  
みじくしづかに、おほやけに御文たてまつ  
り給ふ。あはてぬさまなり。かくあまたの  
人を給ひて、とゞめさせ給へど、ゆるさぬ  
むかへまうできて、とりいてまかりぬれば、  
口おしく、かなしき事。宮づかへつかう  
まつらざるぬるも、かくわづらはし  
き身にて侍れば、心えずおぼしめさ  
れつらめども心づよくうけたまはら  
ずなりにし事、なめげなるものに思召

り奉れ。きたなき所の物きこしめした  
れば、御心ちあしからんものぞとて、もてよ  
りたれば、いさゝかなめたまひて、すこし、か  
たみとてぬぎ置ころもにつゝまんとす  
れば、ある天人つゝませず。御ぞをとり  
出して、きせんす。その時に、かぐやひめ、  
しばしまてといひ、きぬきせつる人は、  
心ことに成なりといふ。もの一こと、いひ置  
べき事ありけりと云て、文かく。天人、  
をそしと心もとながりたまひ、かぐや

姫、ものしらぬ事、なのたまひそとて、い  
みじくしづかに、おほやけに御文たてまつ  
り給ふ。あはてぬさまなり。かくあまたの  
人を給ひて、とゞめさせ給へど、ゆるさぬ  
むかへまうできて、とりいてまかりぬれば、  
口おしく、かなしき事。宮づかへつかう  
まつらざるぬるも、かくわづらはし  
き身にて侍れば、心えずおぼしめさ  
れつらめども心づよくうけたまはら  
ずなりにし事、なめげなるものに思召

とらめられぬるなん、こころにとまり  
はべりぬとて哥

今いとてあまの

はごろも

きるおりぞ

君を哀と

おもひいでたる

とて、つぼの薬そへて、頭の中將を  
よびよせて、たてまつらす。中將  
に、天人とりてつたふ。中將とり

つれば、ふとあまのはごろもふと  
あまのはごろもちきせたてまつ  
りつれば、おきなを、いとおし、かなしと

おぼしつる

事も

失ぬ。



あめきぬきつる人いねもものすくまわ  
よきれしくももたつて百人ばかり天  
人ぐして上りぬ。そのうち、おきな、女、ちの  
なみだをながしてまどへど、かひなし。  
あの書をきし文をよみてきかせ  
けれど、何せんにかいのちもおしからん。  
たがためにか。なに事もようもなし  
とて、くすりもくはず。やがておき  
もあがらで、やみふせり。中将、人くひき  
ぐして、かへりまいりて、かぐや姫を、えたくかひ

とめず成ぬるを、こまぐとそうす。  
くすりのつぼに御文そへて参らす。  
ひろげて御覧じて、いとあはれがらせ  
給ひて、ものもきこしめさず。御あそびな  
どもなかりけり。大臣、上達部をめて、いづ  
れの山か、天にちかきと、とはせたまふ  
に、ある人そうす、するがの国にあるな  
る山なん、此みやこもちかく、天もちか  
く侍るとそうす。これをきかせ  
たまひて、

このきぬきつる人は、物思ひなくなり  
にければ、くるまにのりて、百人ばかり天  
人ぐして、上りぬ。そのうち、おきな、女、ちの  
なみだをながしてまどへど、かひなし。  
あの書をきし文をよみてきかせ  
けれど、何せんにかいのちもおしからん。  
たがためにか。なに事もようもなし  
とて、くすりもくはず。やがておき  
もあがらで、やみふせり。中将、人くひき  
ぐして、かへりまいりて、かぐや姫を、えたくかひ  
とめず成ぬるを、こまぐとそうす。  
くすりのつぼに御文そへて参らす。  
ひろげて御覧じて、いとあはれがらせ  
給ひて、ものもきこしめさず。御あそびな  
どもなかりけり。大臣、上達部をめて、いづ  
れの山か、天にちかきと、とはせたまふ  
に、ある人そうす、するがの国にあるな  
る山なん、此みやこもちかく、天もちか  
く侍るとそうす。これをきかせ  
たまひて、



あふこともなみだに

うかぶわが身には

しなぬくすりも

なにかはせん

彼たてまつる不死のくすりに、ふみ、  
つぼぐして、御つかひにたまはず。ち  
よくしには月のいはかさといふ人を  
めして、するがのくにゝあなる山のい  
たゞき、もてつくべきよし、おほせた  
まふ。みねにてすべきやう、をしへさせ

たまふ。御文、ふしのくすりのつぼ、なら  
べて、火をつけて、もやすべきよし、おほせ  
給ふ。そのよし、うけ給はりて、兵者共  
あまた具して、山へのぼりけるよりなん、  
其山を、ふじの山とは、名付ける。その煙、  
いまだ雲の中へたちのぼるとぞ、

いひつたへ

たる。

竹取物語下終

竹取物語下 終

